を開発した。ボールビィとビックのアプローチは、外からの観察vs内的世界の理解、科学的vs体験的等々、極めて対照的である。彼らは他の理由からも対立し、結果としてビックがタヴィストックを去った。しかし彼女が定めた情動的な経験と観察に重きを置く「乳児観察」の方法は、タヴィストックの児童精神療法家訓練の中心の一つとなったばかりでなく、一九六二年には英国精神分析協会の訓練プログラムの一部に採用され、今日ではイギリスのあちゆる精神療法の訓練の基本的なカリキュラムの一つである。

ビックはタスティンの分析者を選んだ。最初ビオンの名前を聞いたとき、タスティンは何も知らなかった。元々、彼女は自分をバランスのとれた洞察力のある女性と思っていて、分析の必要があるとは思っていなかった。彼女が関心をもったのは子供であって、自分ではなかった。分析は訓練のために必要だが不便な一部分であった。実際にビオンに会って、彼女はかつて経験したことのない不快な思いをした。彼女は彼に恐怖を感じ、寝椅子に抵抗したが、最初の週の内に彼の印象は変わった。分析は彼女がアメリカに行った期間と病気療養中を除いて、一四年間続いた。

一九五三年に彼女はタヴィストックでの訓練を終え、児童精神療法家の資格を得た。彼女の自閉症との最初の接触は、一九五二年にボールビィがタヴィストックに招いたマリオン・パットナムによる講演だった。彼は、フロイトの考えと行動療法を組み合わせた治療法をとる、パットナム・センターで働いていた。自閉症は、関係と空想された関係の分析に基づくクライン派の射程距離を超えているようで、挑戦を感じさせた。タヴィストックの中でも、ビック或いは後にメルツァー(一九七五)が仕事をまとめあげたホクスター・ブレンナー・ウェデル・ウィッテンバーグらが自閉症に取り組みつつあった。シカゴでは、ベッテルハイムが自閉症の精神分析的な治療を行っていた。

こうして彼女の自閉症への関心が高まっているとき、好運がやってきた。夫がマサチューセッツ工科大学に招聘されたので、彼女がボストンのパットナム・センターで研修することが可能となったのだ。彼女はボールビィに推薦してもらい、現地で自閉症治療プログラムに参加することができた。もっとも、彼女には心理学者或いは医者としての資格はなく、もっぱらタヴィストックでの訓練と経験が頼りだった。彼女はクリニックで診察するだけでなく、自閉症児たちの家庭まで出向いて両親が休んでいる間に彼らの世話をした。彼女はクリニックにあった一〇年分の診察記録を全て読み、自閉的状態が親にも子供にももたらす悲劇に心を打たれた。彼女は母親たちに共感的で、「冷蔵庫のよう」といった批判はしていない。ただ、母親が敏感で世話をよくする人たちではあっても、内的外的な支持がないために自信と柔軟さに欠けていて、彼らの不安が乳児の無反応性に混ざりあっていることに気づいた。

帰国後、タスティンはグレート・オーモンド通り病院の児童精神療法家となった。彼女はアメリカでの経験を見込まれて、自閉症児の治療を依頼された。彼女はすぐに、クライン派として学んだことが彼らを理解するために十分ではないことに気づいた。彼女の格闘と理解の展開は、次回に改めて見るとしよう。

(ふくもと・おさむ　精神医学)

イマーゴ Vol.7(11).77-85, 1996.

自閉症の精神病理から認知と情動の関連性について考える

小林隆児

はじめに

自閉症の基本障害は言語認知面の障害が一次的であって対人関係障害(自閉性)はあくまで二次的なものである、とする言語認知障害仮説が長い間多くの研究者によって支持されてきた。このような器質因を重視する自閉症成因論が背景となって、今日の生物学的志向性の強い精神医学の世界において実におびただしいほどの生物学的知見が次々にもたらされている。しかしその反面で、自閉症の人々の心の中を解明していこうとする努力は軽視され続けてきた。[1]

今日の科学的研究では、精神内界は主観的かつ恣意的であるため、それを扱う研究は客観性に乏しく非科学的だとして積極的な評価を受けず片隅に追いやられてしまっている。あくまで客観的な手法を用いて行うことが科学的研究の本道であるとされ、もっぱら行動観察や種々の検査手法を通して得られた知見をもとに自閉症理解が進行している。

言語認知障害仮説[10]は今日では心の理論障害仮説[2]へとそれなりの発展を見せてはいるが、それもあくまで認知障害仮説の延長線上のものでしかなく、脳障害の結果もたらされた認知障害で自閉症の病態を説明しようとするものであることに本質的に変わりはない。このような考え方は、子ども自身(とりわけ中枢神経系)の中に主たる原因を求めようとする考え方で、個体能力発達障害論ともいえよう。

対人関係障害は精神病理学の世界では自閉性と表現されてきたが、「自閉性」なる用語は二次的なものであり、主観的、恣意的、非科学的であるとの理由からその使用も極力避けられてきた。「自閉性」と表現される病態の内実も結局は個人内の精神病理として片づけられてきたといえようが、はたしてそのような視点から自閉症の精神病理学的研究の新たな道が切り開かれていく可能性を見いだすことができるであろうか。

筆者はささやかではあるが本稿でこれまで関心をもち続けてきた

自閉症の精神病理について、「自閉性」を「コミュニケーション障害」とみなす視点に立ち、コミュニケーションの発達に関する最近の乳幼児心理学的知見を基本にすえ、自閉症にみられる様々な精神病理現象を発達的観点から検討してみたいと思う。

1　ある成人期に達した自閉症者の苦悩から

二八歳になったある自閉症の女性が、治療もかなり好ましい展開を遂げていたある時期に、つぎのようなメモを主治医である筆者に面接の始めに手渡してくれた。

「私毎日毎日ずーっと悲しみが続きっぱなしで洗たくの時でも部屋の掃除の時でもぞうきんで廊下を何回かをふく時でも朝、昼、晩、ご飯食べる時でも食事の後茶わんやおわんや小皿、大皿、こばち、コップ、湯のみ、みんなのおはし、スプーン、ぜんぶ洗って乾燥機に入れる時もふとん干したり又直す時でもしょっ中私の時計見る時でも昼ねや夜ねてふとんの中に入って空気を吸う時でも夜ねる前ふとんしく時でも朝起きてふとんをたたむ時でも自分の服を着る時でもふろに入る前服をぬいでたたむ時でも朝パン食べた後牛乳を飲む時でも何か音楽を聞いてレコードやCDやテープを聞いて曲を変える時でもふろに入ってまずマタ(股)の所を洗うのに湯をくむ時でも顔、体洗う時でも髪を洗って何回も湯くんで髪を注ぐ時でも朝晩私化粧水や乳液つける時でも私の目まぶたを二え(二重)まぶたをする時でも髪をくしでとかす時でも朝、晩、歯みがきをする時でも自分の楽書き(落書き)ノートをいつも見てページをめくる時でもふろを洗うのにたわしできれいにこする時でも兄が休みの時に兄が新聞をよく見てページをめくっていく時でも私寒い時にストーブをつけもし火が出た時回す時でもみんな悲しみがずーっと続きっぱなしです……」(メモに記された通りに記載されているが、括弧内は筆者が加筆したものである。)

さらには歩く時にも「ころばないように気をつける。右足だったり、左足だったり」というふうに意識的に動作をしないと移れないというのだった。

彼女の言葉の使い方には彼女特有な意味合いがこめられているため、単純には理解できない。しかし、このメモの中で使用されている「悲しみ」は我々には想像のできないほどの苦悩が込められていることは容易に推測できよう。日常生活におけるすべての動作が彼女にとっては自然な形では行われず、一挙手一投足にわたって強く意識しないと次の動作に移れないというのである。そんな娘の訴えを聞いた母は「どうも何をするように言っても、すぐに動作に移れない。何をするのもしんどいようだ。意識的にやらないと何もやれないようだ」とその印象を実に的確に述べていた。

彼女はそのおよそ三年前から筆者のもとに紹介されて治療が定期的に行われていたのであるが、初診時の主訴は、周囲の人々がみんな輝いていてきれいだ、自分だけが醜い、そのために悲しい、というものであった。容貌コンプレックスないし醜貌恐怖が妄想水準にまで発展しているとみなせる病態であると判断し、治療が開始された[7]。治療は難渋をきわめたが、この頃にはかなり好転の兆しがみられていた。醜貌恐怖に関する訴えが消退し始めた時期に先ほどのような深刻な内容の訴えが語られ始めたのである。

彼女はその他にも面接の時に主治医に向かって、「(主治医が前かがみになると)悲しくなる。自然な動作(彼女にいわせると、きちんとすわってうしろに背をもたれることらしい)をしてほしい」と執拗なまでに訴え続けた。面接時の筆者の姿勢を取り上げて問題とするようになったのであるが、この訴えには筆者も当時随分と悩まされた。筆者にとって自然な態度と思われる振る舞い方は彼女にとっては不自然で、彼女が訴える自然な動作は筆者にとってはもっとも不自然な振る舞い方になってしまう。しかし、彼女はいつも決まった姿勢を保持していてほしいというである。それは本来の「自然な」動作ではないのだが、いつも一定の姿勢を保持することが彼女にとっては「自然な」動作であるということが、二人のやりとりのなかで筆者にも次第に理解できるようになった。瞬時に次々と変化するひとの身体の動きは彼女にとってその動作に示されている様々な意味を読みとることができないためか、一定の姿勢を保ってもらうことでもってしか彼女の心の中の混乱は静まらないということなのであろう。このことは幼児期の自閉症診断の際にもっとも重視される症候の一つである同一性保持と同質の精神病理を示しているといってよいだろうが、筆者がもっとも注目したのは、その前に延々と訴え続けた日常動作すべてにわたって意識を集中させないと振る舞えないという苦悩であった。

彼女の訴えが分裂病の精神病理の世界でつとに有名な「自明性の喪失[1]」とあまりにも酷似していることに驚かれた読者も少なくないと思う。「自明性の喪失」と類似した精神病理現象が彼女のような高機能自閉症(知的発達に有意な遅れを伴わない自閉症をいう)に認められることは少なくないのである。実は我々には把握できていないだけであって、高機能自閉症に限らずすべての自閉症の人々に同質の不安が存在していると筆者には思われるのである。

言葉に限らず日常動作すべてにわたるこのような不確実性が、なぜ自閉症の人々に認められるのであろうか。そのことを解明していくためには、人間にとって言語機能がどのようなプロセスを経て発達していくのか、という人間発達にとってもっとも根源的とも思えるような難解な疑問を避けて通ることができなくなるのである。

2　自閉症にみられる言語認知障害をどう考えるか

(1)　自閉症の言語認知障害仮説への疑問[5]

言語認知機能の獲得に際立った障害があるところに自閉症の最大の特徴があることは今や常識となっているが、その原因を脳の機能に障害があるためだと短絡的に考える傾向が強いことも事実である。言語認知機能の獲得が脳の機能の発達を抜きにしては考えられないことは確かであるにしても、社会性の発達がそれとどのように関連しているかという点については実はあまり詳細には検討されていない。このような問題が提起される契機となったのは、自閉症の長期追跡調査を通して言語認知発達に長足の進歩が認められる高機能自閉症やアスペルガー症候群(本特集号にも述べられているが、高機能自閉症との異同が問題とされているもので、言語認知機能の高い水準にも拘わらず自閉性が強く残存していることから最近大きな注目を集めている)に社会性の障害が強く残存していることが明らかになってきたことである。これまで言語認知障害が一次的障害であって社会性の障害はあくまでその結果の産物であるとみなされていたが、さほど短絡的に考えられないことが分かってきたのである。

(2) 自閉症にみられる言語認知障害の特徴

言語・認知機能の発達はどのようなプロセスを経て進展していくのであろうか。自閉症ではなぜその機能の獲得に著しい障害が生じるのであろうか。

自閉症に認められる言語認知障害には、他の発達障害には認めがたい特徴があることはこれまでにも幾度となく指摘されてきた。たとえば言語障害の特徴としては言葉の読み書きや文法能力には問題が少ない子どもでも言葉をどのような状況で用いたらよいか、または言葉がその用いられる状況によってその意味がどのように変わるか、といった語用論的理解における障害が最も特徴的であるとされている。つまりはコミュニケーションの際に生きた言葉を用いることが殊の外困難なのである。話し手の意図が実際にはどこにあるのか、相手はなにを言いたいのかということがなかなか読みとれないのである。そのため実に奇妙な応答が展開することになる。

一例を挙げてみよう。これは筆者の恩師である村田豊久氏(九州大学教育学部教授)がよくわれわれに教えてくれた実にわかりやすい例である。

この少年は幼児期から難しい算数問題もすらすら解くので、地元では天才少年として評判の子どもであった。小学校時代の朝礼で校長の講話があった時である。整列していた子ども達の中に私語をしている者が何人かいたのであろう。校長は「誰ですか、お話をしているのは」と大きな声で言ったのである。すると絶妙なタイミングでその少年は「校長先生です」とこれまた大きな声で真剣な調子で答えたというのである。

筆者はこのように真顔で答える自閉症の子ども達の思いを想像するとなんともいえない微笑ましい感情が湧き起こってくる。文字面からのみ判断すると決して誤った表現ではないのであるが、その場の状況が読みとれないための苦し紛れの表現なのであろうか。自分の気持ちに実に正直に行動している彼の姿を彷彿とさせるのである。

このようにみていくと、本来の望ましい言語機能の獲得に当たっては自分を含めた周囲の状況がどうなのかという認識がしっかりと把握されていないと生きた言葉を体得することは実に困難なことがわかる。

3 自閉症とコミュニケーションの発達

(1) コミュニケーションの発達—特に情動的コミュニケーションについて

ではそうした生きた言葉を人間はそもそもどのようにして体得していくことができるのであろうか。そのことを知るためには乳児とその養育者との間で繰り広げられるコミュニケーションの成立過程を検討する必要がある。

今日コミュニケーション論は様々な学問領域で注目されている。しかし、コミュニケーションの発達段階の最も原初的形態として情動的コミュニケーションが存在することは意外と知られていない。[8] 一般的に想起されるコミュニケーションが人間相互間でのある観念のやりとりとして捉えられ、情報処理モデルなども援用しながら検討されているが、これはあくまでシンボル機能水準でのコミュニケーションが中心になっている。そもそものコミュニケーションの原初的形態はそうではなく、情動水準でのものがまず存在するということである。最初の段階では母子間で情動的コミュニケーションが次第に成立し、その後の進展の結果としてシンボル機能水準のコミュニケーションへと発達していく。それはまさに人間がより広い社会性を獲得していく過程と密接に関連しながら展開していくのである。

ここで取り上げた「情動」とは生物学的意味合いの濃い概念であるが、新生児段階でこの情動を中心とした機能が重要な役割を果たしながら母子間でコミュニケーションが深化していくとされている。ただし、この時期のコミュニケーションの最大の特徴は乳児と母親との間でお互いの気持ちが瞬時に通いあうという性質のもので、同時的なものであるといわれている。その点がその後のシンボル機能水準のコミュニケーションのような方向性をもったやりとりとは質的に大いに異なるところである。情動的コミュニケーションの世界では二人の間でいつの間にか気持ちが通い合い、ある種の情動が共有される現象が起こるのである。ちょうど振動数の同じ二つの音叉を並べ、一方の音叉を振動させると他方の音叉も共振する現象によく譬えて語られている。

(2) 乳児期の情動的コミュニケーションと知覚様態

実は情動的コミュニケーションを可能にしている大きな要因の一つに、乳児期に特有な知覚様態の働きが指摘されている。相貌的知覚 physiognomic perception[13]や生き生きした情動 vitality affect[14]といった独特な知覚の仕方が乳児期に活発であることが情動的コミュニケーションを可能にしているというのである。一般的に知覚様態として五感(視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚)がよく取り上げられるが、これらのようにある単一の様態に分化した知覚様態ではなく、それらは知覚の原初的形態である無様式知覚 amodal perception の特徴を備えている。様々な物事や事象を客観的に捉えるのではなく、情動や運動を伴った形で自分と環境世界とが融合したような世界の中で、自らもその中にどっぷりと浸かりながら、一体となって環境世界を知覚していくというのである。そこでは当然自らの身体内部で生じる多様な変化にも同様な知覚が行われるため、自らの情動や運動の変化が環境世界の知覚のあり方をも大きく左右することにつながっていくのである。形態・リズム・強弱などの力動感を伴ったものを実に鋭敏に知覚するというのである。

(3) 自閉症の特有な知覚様態

ここでは詳細に述べるゆとりはないが、筆者は自閉症の人々の知覚様態はこうした乳児期に独特な無様式知覚が加齢を経ても脈々と息づいて活発に作動している状態にあるとの仮説を立てている。[3][4][5][6] このように考えていくと自閉症の人々にみられる対人反応の特徴が実によく説明できる。彼らは対人関係に鈍感どころか極度に過敏であるがための反応とみる方が事実に適っている。彼らはある人には安心して過度に接近する。そうかと思うとある人には極端なまでに回避してしまう。ある情動の高まりの場では実に人間らしい内面がほとばしり出るかと思うと、その場を離れるとまるで何事もなかったかのように能面のような表情に豹変してしまう。こうした過敏さは従来知覚の恒常性の異常といった生物学的側面での障害とみなされてきた。しかし、われわれにとっても知覚現象はそもそも恒常的な

ものではないことは、周知の事実である。

(4) 自閉症における情動的コミュニケーションの特徴

では、自閉症の人々ではなぜ情動的コミュニケーションの進展が困難となってしまうのであろうか。これまでは言語認知障害が基盤にあるために対人回避、すなわち自閉的傾向が生じるのであるとみなされてきた。そのためこの点については深く検討されてこなかったのであるが、筆者が自らの治療実践を通して強く実感しているのは、彼らには異常なまでに強い対人回避傾向がある一方で、その背後には対人接近欲求もそれに勝るとも劣らないほどに強いものがあるという事実である。このことは動物行動学の世界では接近・回避動因的葛藤 approach-avoidance motivational conflict[12]としてよく知られている。精神医学の世界でいうところのアンビバレンスと類似した概念である。

このように自閉症に異常なまでの対人接近恐怖が存在するのは、何らかの生物学的要因を想定しないと理解することは困難であるが、治療によって比較的容易にこの種の対人接近恐怖は緩和するのである。このような過敏性を緩和することが幼児期早期に可能になっていけば、自閉症にみられる社会性の障害が改善し、その結果として言語認知面のその後の発達も歪みを残さずにすむのではないかと期待されるのである。

なぜ筆者はこのように情動的コミュニケーションの重要性を執拗に主張するかといえば、人間にとって本来の言語認知機能の獲得はこのようなコミュニケーションの進展を抜きにしては考えられないと思うからである。

4 言語認知機能の発達と社会性の発達との関連性

言語認知機能というものを、もともと人間に生来的に備わったある種のプログラムによって、脳の成熟過程で必然的に獲得されていくものである、とみなす立場がある。確かに、言語認知機能は脳の成熟過程を抜きにしては考えられないことは事実であるにしても、社会性の発達と不可分に関連しながら獲得されていくものであることが、昨今の乳幼児心理学研究で随分と明らかになりつつある。

われわれの身の回りの世界に存在する多くの事物や事象には言葉によって何らかの意味が付与されている。たとえば「みかん」を例にとってみるとしよう。みかんにも実に多くの品種が存在するし、同じ品種でも色・形・味・肌触りなど様々な属性がすべて微妙に異なっていてどれ一つとして同じみかんはこの世には全く存在しない。しかし、それらの属性の中から何らかの特徴を取り出してわれわれは「みかん」と称して使っている。このように類似の事物や事象の中で共通の属性を取り出してそれをある言葉で表現する精神機能を概念化ないし抽象化といっている。

では共通した属性を取り出す作業はどのようにして行われているのであろうか。実に多様な属性の中からいくつかを取り出して行われるこの種の作業は極めて恣意的なものである。これが絶対に正しいといったものではないのである。日常的に生活を共にしながらその事物や事象に触れるということを通していつの間にかその事物や事象の中で共通の属性が相互に認識されるようになり、そこに必然的に共通の意味が付与された言葉が生まれてくると考えられるのである。このような認識の仕方は長い期間の日々の生活体験の蓄積があって初めて可能になっていくものである。同じ文化的背景をもった者同士では容易にこのことが可能になってくるのであるが、文化的背景をことにする者同士であると、同じ人間であっても容易には共通認識を獲得できないことは経験的によく理解できることである。

われわれ人間は乳児期早期から母親を通してこのような物事の認識の仕方を暗黙の裡に教えられて成長していく存在である。最初は自らの動作や身振りに特別の意味が付与されていなかったにもかかわらず、母親は乳児の一挙手一投足を受け止め、それに対して実に多くの応答を繰り返している。その応答の仕方をみると、自らの体験を通して乳児の行動の意味を感じ取り、何らかの言葉ないし感情でもって頻繁に応答している。母親が最初に教える身振りにも文化的意味が隠されているといわれる。育児とはそもそも親から子どもへの文化伝達の営みであるといわれる所以はそこにある。こうした育児の過程で子どもは大人たちとの密接な交流を通して物事の認識の仕方をおのずと体得していくのである。認知機能とは、けっして脳が成熟していけば必然的に獲得されるような性質のものではなく、共通の文化的背景をもつことによる暗黙の共通認識であって、そこには密接な対人交流の蓄積があって初めて習得可能になるものなのである。

5 情動的コミュニケーションと言語認知機能の発達

物事の認識の仕方には対人交流の蓄積が密接に関わっていることが、乳児ないし自閉症ではどのような現象として示されているのであろうか。

先に情動的コミュニケーションの進展がその先に続くシンボル機能水準のコミュニケーションの発達にとって不可欠な要素であることを強調してきた。社会性の発達の原初的形態である母子間の二者関係において、相互に情動が豊かに共有されるようになると、お互いの気持ちが容易に通底し合うようになる。そうした両者の情動の深まりによって必然的にお互いの意図(相手が何をしようとし、何に関心を向けているか)が通じ合うようになっていく。つまりは両者の間で注意、関心、意図などが容易に共有されていくようになる。このようになると、二人一緒になってある対象をみつめ楽しむことが出来るようになり、そのことでもって両者間で大きな喜びが共有され、さらに情動的コミュニケーションが深まっていくという循環が繰り返されるようになる。この時期の現象は共同注視 joint attention と称され、その欠陥を自閉症の基本障害として重視している研究者もいる。[9]

育児は極めて文化的な営みであると先にも述べた。養育者の側が行う働きかけがこのような情動的コミュニケーションの深まりの過程を通して蓄積されていくわけであるが、そこでは当事者が意図するしないに関わらず、養育者自身はそれまでに身につけた文化的な意味を担った形で物事や事象を乳児とともに体験していくことになる。その中で乳児は体験に何らかの意味があることを次第に認識していくことになるのである。

このように考えていくと、両者間で共通の認識が生まれていくためには、二人の間でお互いの意図が共有されていることが不可欠で

あることが分かってくる。もしも子どもが心の中で意図していることを養育者がひどく誤って認識し、両者の間で意図が共有されず著しいずれが生じているような事態を想定してみたらどうであろうか。

例えば、ある自閉症の子どもが、長時間じっと一つのコップを眺めて悦に入っていたとしよう。子どもはコップの面に反射し絶え間なく変化しながら照り輝いている光の面白さに夢中になっているのかもしれない。もし養育者ないし治療者がそれをみて、コップを眺めているからといって、コップに類する言葉を盛んに発しながら働きかけているとしたらどうなるであろうか。そこでは子どもの意図や関心と養育者側の意図が全くずれてしまっているため、両者にとって実に苦痛を伴う関わりが展開することになる。

実は自閉症の人々への治療的関わりと称して行われている働きかけの多くがこのような両者にとって悲惨な状況の中で行われていることが、当事者を含めてあまりにも理解されていないことが多い。

おわりに

自閉症教育に長年携わってこられ、最近退職されたある教師から聞いた話は感動的であった。

自分が担当していたある自閉症の子どもが水道の水をホースを使って撒水するのに長い期間没頭していたという。その教師は彼との関係を作っていくことに随分と苦労されたのだが、彼とことん付き合う中でやっと彼が水遊びに没頭している理由が分かったという。彼と同じ目の高さでホースから勢いよく流れ出る水を眺めていた時、水の飛び散っていった方向を見やると、実にきれいな虹が出ているのが発見できたという。「きれいだね」とその感激を思わず言葉にした時から、彼との関係が急速に深まっていったというのである。

お互いの間で意図が共有されることがいかに彼らの療育を考える上で大切かを教えられる話である。もしも幼児期早期に、彼らとの間でこのように気持ちが容易に通底し合う関係が成立していくと、それまでの自閉的と印象づけられていた彼らの行動の多くはほとんど消退していってしまうことを筆者は大半の例で経験してきた。実はこのことは乳幼児期のみに当てはまることではなく、人間の生涯全般にわたってわれわれ自身にも常につきつけられている課題といわなくてはならない。

言葉の獲得が多くの他者とのコミュニケーションを可能にしてくれているという喜ばしい側面がある一方で、言葉のみの情報に踊らされて人間本来の情動の共有を基盤にした生き生きとした体験が希薄になっていくという実に恐ろしい状況が、どんどんわれわれの周囲では進行しているのである。言語機能はこのように諸刃の剣という側面を有していることをわれわれは忘れてはならないのである。そのように考えると自閉症問題はわれわれ「健常者」にとってけっして他人事ではない、人間にとって極めて根源的な問題を含んでいるということがよくわかるのではなかろうか。

文献

(1) Blankenburug, W. (1971). *Der Verlust der naturlichen Selbstverstandlichkeit*. Ferdinand Enke Verlag, Stuttgart.木村敏・岡本進・島弘嗣訳(一九七八)、『自明性の喪失』みすず書房。

(2) Frith, U. (1989). *Autism: Explaining the enigma*. Oxford, Blackwell.冨田真紀・清水康夫訳(一九九二)、『自閉症の謎を解き明かす』、東京書籍。

(3) 小林隆児(一九九三)、「自閉症にみられる相貌的知覚とその発達精神病理」『精神科治療学』八、三〇五-三一二。

(4) 小林隆児(一九九三)、「自閉症における『知覚変容現象』の現象学的研究」『精神医学』三五、八〇四-八一一。

(5) 小林隆児(一九九三)、「精神遅滞と自閉症——自閉症の認知障害に関する再検討」『神経精神薬理』一五、七七三-七七九。

(6) 小林隆児(一九九四)、「自閉症にみられる相貌的知覚と妄想知覚——情動的コミュニケーションの成り立ちとその意義」『精神医学』三六、八二九-八三六。

(7) 小林隆児(一九九五)、「自閉症にみられる妄想形成とそのメカニズムについて」『児童青年精神医学とその近接領域』三六、二〇五-二二二。

(8) 鯨岡峻(一九九〇)、「コミュニケーションの成立ち」『教育と医学』三八、五〇七-五一四。

(9) Mundy, P. & Sigman, M. (1989). The theoretical implication of joint attention deficits in autism. *Development and Psychopathology*, 1. 173-183.

(10) Rutter, M. (1983). Cognitive deficits in the pathogenesis of autism. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 24, 513-531.

(11) Stern, D. (1985). *The interpersonal world of the infant: A view from psychoanalysis and developmental psychology*. New York: Basic Books.小此木啓吾・丸田俊彦監訳(一九八九)、『乳児の対人世界 理論編』、岩崎学術出版社。

(12) Tinbergen, N. & Tinbergen, E. A. (1984). *Autistic children: New hope for a cure*. Verlagsbuchhandlung Paul Parey, Berlin.田口恒夫訳(一九八七)、改訂『自閉症・治癒への道——文明社会への動物行動学的アプローチ』新書館。

(13) Werner, H. (1948). *Comparative psychology of mental development*. New York: International University Press.鯨岡 峻、浜田寿美男訳(一九七六)、『発達心理学入門』、ミネルヴァ書房。

(14) Williams, D. (1992). *Nobody nowhere*. New York, Times Books.河野万里子訳(一九九三)、『自閉症だったわたし』、新潮社。

(こばやし・りゅうじ 児童精神医学)

●今注目の〈関係嗜癖〉という観点から賢治を精神分析する！

【賢治】の心理学

——献身という病理——

矢幡洋著 献身の人賢治—今なお多くの人が惹きつけられるその献身性にこそ彼の病理があった。摂食障害、ワーカホリック等の現代的な病理（生き方の病）と賢治の精神の共通性に焦点を当てる力作。 定価二二六六円

登校拒否のエスノグラフィー

朝倉景樹著 学校外の居場所に通う子どもたちのアイデンティティの変容を通して揺れる学校社会の矛盾を照射する。 定価二五〇〇円

逃走の力

フーコーと思考のアクチュアリティ

バーナウアー／中山元訳 最良で最〈深〉の入門書。定価四五〇〇円

彩流社 目録送呈

〒102 千代田区富士見 2-2-2

☎03（3234）5931 価格税込